



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

March 21, 2001, No. 10

ご挨拶

ASLE-Japan代表 山里 勝己

在外研究中に代表に就任したため会員の皆様にご挨拶する機会がありませんでしたが、ニューズレターの誌面を借りて、一言、ご挨拶を申し上げます。

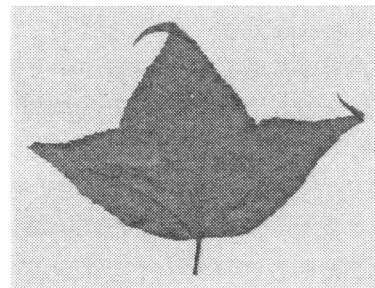
ASLE-Japan/文学・環境学会はその発足以来、野田前代表のリーダーシップと会員諸氏の献身的な協力で困難な時期を乗り切ってきました。特に、野田前代表のご苦勞は並み大抵なものではなく、若い学会の運営に邁進し、その発展に尽力されたことについては学会を代表して深く感謝申し上げます。また、この間、ホノルルでの日米合同学会の成功、さらにはミネルヴァ等の様々な企画の推進を通して学会が社会的に認知されるための重要な仕事を立ち上げ、完成に導いた功績に対しても心から感謝申し上げます。

さて、帰国して実際に仕事を始めてみると、代表の重責にいささか戸惑っているところです。野田前代表のような強力なリーダーシップで学会の活動に貢献できるかどうか、いささか不安が先に立ちます。しかし、代表を引き受けた以上は、役員会、そして会員の皆様のご協力を得ながら、なお一層の学会の発展のために力を尽していきたいと考えております。本年度の大会の具体的な準備が始まりました。また、国際学会開催の提案もありますので、5月の役員会でお諮りし、総会での議論を経た上で、ASLE-Japanが中心になって日本で国際学会を開催するというのも考えてみたいと思っております。ASLE-UK, ASLE-Australia等の発足でASLEの国際的な輪が広がりつつあり、アジアでは韓国、台湾でもASLE結成の動きがあるようです。国際学会は、日本からの情報発信のための重要な契機になるでしょうし、世界の研究者たちと交流する絶好の機会になるものと思われまふ。その他、会員の皆様からのご意見をいただきながら、出版を含めた様々な企画を学会として推進できたらと願っております。

ネイチャーライティング、あるいは環境文学の分

野は、日本では紹介の時期から、研究の深化、新しい理論の創造へと向う時期に入ってきました。アメリカでも、80年代の不安に満ちた出発からは想像もつかなかったような進展が見られます。特に90年代後半から21世紀にかけての研究の深化と急速な展開は、研究者個人の力を遥かに越えて行く勢いです。学会の意義がここに認められると思います。ASLE-Japanの役割、目標を国際的なレベルで再認識する中で、会員諸氏の一層の研究の深化が期待されます。

微力ですが、新代表として、ASLE-Japanの新たな発展のために力を尽してみたいと考えております。ご協力のほど、よろしくお願い致します。



1) 役員リスト (2000-2001年)

代表：山里勝己(琉球大学)

副代表：木下卓(愛媛大学)、高田賢一(青山学院大学)

事務局幹事：高橋勤(九州大学)、結城正美(豊橋技術科学大学)

会計：横田由理(広島中央女子短期大学)、小谷一明(新潟女子短期大学)

監事：秋山健(プール学院大学)

ニューズレター編集委員：加藤貞通(名古屋大学)、有為楠泉(名古屋工業大学)、重松宗純(名古屋大学・院)

会誌編集委員：上岡克己(高知大学)、Bruce Allen(順天堂大学)、村上清敏(金沢大学)、伊藤詔子(広島大学)、石幡直樹(東北大学)

運営委員：

【コンピュータセンター】高橋守(秋田県立大学)、岩政伸治(東京外国語大学・講)、山城新

(ネヴァダ大学・院)

【大会・研究会運営】赤嶺玲子、生田省悟（金沢大学）、岩井洋（酪農学園大学）、大神田丈二（山梨学院大学）、太田雅孝（大東文化大学）、近江満理子、笹田直人（明治学院大学）、巽孝之（慶応義塾大学）、外岡尚美（青山学院大学）、中村邦生（大東文化大学）

【研究助成】稲本正（オークヴィレッジ）、岡島成行（青森大学）、野田研一（立教大学）

2) 新事務局

ASLE-Japan/文学・環境学会

事務局：琉球大学法文学部

山里勝己研究室内

〒903-0213 沖縄県西原町千原1番地

Tel&Fax: (098)895-8295

E-mail: yamazato@ll.u-ryukyuu.ac.jp

ASLE-UK

大会報告

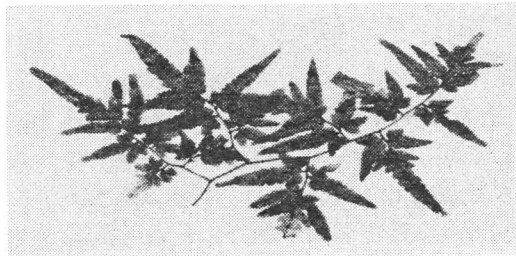
(2000年9月6~8日
ロンドン、ドックランズ)

"Writing the Environment"

Anna Ford (甲南大学)

2年前、ASLE-UKの設立をもって終了した会議はバース・SPA大学の牧歌的な環境の中で開催された。同大学の校舎は元カントリー・ハウスで近くには僧院もあり牧草地の中に位置していたため、敷地内から望む風景には羊や牛が点在していた。ドーセットへのエクスカッション、またハーディー生誕の地を訪ねたことも古き時代のイングランドの田園を堪能する体験だったことを思い起こす。今年の都市的な開催地がこれとは顕著に対照的だったことは言うまでもない。イースト・ロンドン大学のDocklandsキャンパスはテムズ川のほとりにあり、活気を呈するロンドン・シティ空港の真向かいに位置していた。前回の会議の羊に代わり、今回は引きも切らぬ様子で離陸着陸を繰り返すジェット機の数々を目にすることとなった。とはいえ、ASLE-UKがこの2年間でめざましく進展したことを正しく測る物差しといえば、やはり豊富な出版物と同大会が扱うトピックの幅の広さということになるだろう。最近の出版活動としては、Jonathan Bateのエコクリティシズムの第二弾 *The Song of the Earth*、Laurence Coupe 編 *Green Studies Reader*、David Ingram による *Green Screen* および John Parham 編で近日発刊予定のエコクリティカル・エッセイ集がある。

昨年のASLE-UK大会には、日本からアンナ・フォードさんのほか、名古屋大の中西須美さんとエドワード・ハイグさんが参加されました。



9月6日(水)

開会講演は、ASLE-UK 会長 Richard Kerridge による "Ecocriticism in a Small

Island: Perspectives for ASLE UK"であった。英国特有の伝統を模索しつつ、Kerridgeはイングランドには原生自然が無いことを指摘した。Jeremy Hookerが述べたとおり英国の原生自然は人の住む土地の余白部分にあり、その特徴を最もよく表す言葉としては彼の言う"ditch vision"（「溝の光景」）がある。Kerridgeは、環境思想が「工業化以前の自然へのノスタルジア」によって特徴づけられるゆえに環境的関心が富裕層の領域とならざるを得ない落とし穴について論じた。エコクリティシズムは、この悪しき信念を複製する発想に加担していることを認識すべきであり、これに取って代わる道筋への軌道修正をはかるべきだと主張した。

同夜のエンターテインメントとして、Richard Kerridge, Hugh Dunkerley, Polly Parkinson, Terry Giffordによる詩の朗読会が開かれた。

9月7日(木)

全体会

Louise (Molly) Westling "Green Humanism": Westling教授は、我々は人間としていったい誰なのかという我々の感覚を見直す、新しい改変の観点の必要性を論じた。Suzanne Langerによるデカルト的二元論の拒否、「我々自身を裏返す」考え方を出発点としてもよい。Westlingにとって現象学的現実根ざしたメルロ＝ポンティの哲学、特に肉体のリアリティが、「我々は時間と空間の連続体の中に浸された肉体である」という物理的現実根ざした発想を提供するのではないかと述べた。デカルトとは

対照的に、メルロ＝ポンティは「この世界は私が考えるものではなく、私があるただ中を生きていくものである」ことを強調している。エコクリティシズムに携わる者たちは、最近の科学者らによる革新的な学術成果に対してより多くの注意を払うべきであることも述べられた。既存の認識論の限界を理解するためにも、不確定性原理、ひも理論、カオス理論また量子力学などを扱う各種理論を吸収していく必要がある。Westlingはまた、ダーウィンの進化論を大変興味深い方法でなぞるMargulisの*Symbiotic Planet*と、最近の霊長類研究を引き合いに出し、いずれも地上における人類の優先的地位を揺るがすものであるとした。加えてWestlingは教育についても言及し、学生たちが自身の内にセンス・オブ・プレイスへの意識を育てるべく、我々は彼らに対して「自分にとって大切な場所」についての物語を書くように強く促す必要があると述べた。我々は教授方法を、より共同作業的な形態を反映したものに変えていく必要がある。最後に同教授は、我々は自分たちの思考法の習慣を新しいものと取って代わらせる必要があるが、それは自意識を完全に覆し、物事をより統合的に具象化された形式で知覚するという思考法であると述べた。

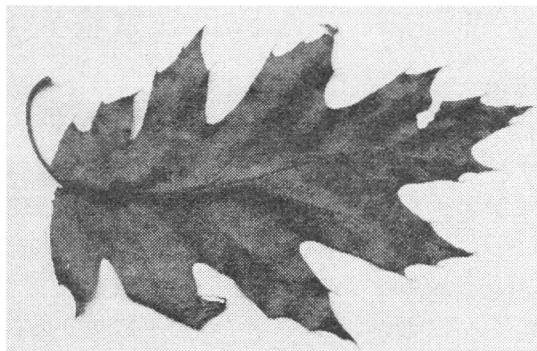
Leonard Scigaj教授は、Wendell BerryからMary Oliver, Gary Snyder, W.S.Merwin, Ted Hughes, A.R.Ammonsまでの詩を幅広く取り扱いながら、"Resistance: Imaging the Resistant Nonhuman"と題された講演をおこなった。Scigaj教授は、「環境詩」(environmental poetry)と、自然観を表現しながらも対象を人間中心的に見たり擬人化している詩との差異について論じた。氏はBuellによる環境文学の4つの判断基準と、教授自身の「レファランス」の発想を用いた。「レファランス」とは、Jamesonによる「言葉の牢獄」から外的世界の叙述に脱出して「人間以上の世界と我々との結びつきを再活性化させること」を可能とするような読みの必要を訴える考え方である。

当日二度目の全体会は、"Environmentalists and the Media"という題で、ガーディアン紙の記者でも

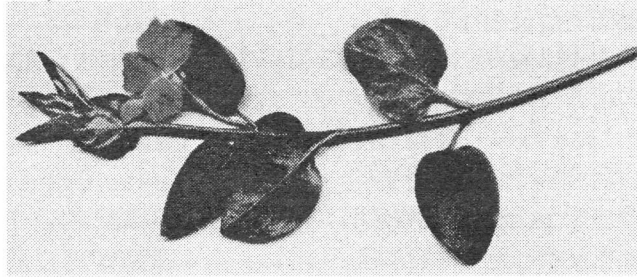
あるUniversity College NorthamptonのRos Cowardが担当した。環境にかかわる記事を紙上に掲載するにあたっての実際上の困難が論じられた。Cowardは、絶滅の危機に瀕するスペインの山猫の特集記事を掲載する時にいかに困難だったかを語った。デスクからの要請は、もっと紀行文形式を取り入れるようにとか、彼女の材料の扱いについても読者の好みに見合うような別のやりかたに変えるようになどというものがあつた。Ros Cowardは新聞業界から、体験の深さとエピソードの豊かさをもって、いったい何が、またそれがなぜニュースとなるのか、私たちが常々思っている疑問を解くヒントを与えてくれた。

9月8日(金曜日)

ASLE会長Sue Ellen Campbell "The Voice of the Crane": Sue Ellen氏の著作を知る人々に対しては、この講演が大会全体のハイライトであったことをあえて語る必要もないだろう。彼女の講演は、「センス・オブ・プレイス」の涵養に関わる学術的研究と、人、場所、歴史についての力あふれる読みを織り交ぜた個人的なナラティブとが組み合わせられた講演だった。題名にあるcrane (ツル)は、コロラドのsandhill craneで、人のある場所と結びつける環境的コネクターの役割をする存在である。講演は、Campbellによる場所についての徹底的探求を詳細に語るものであり、古生物学、考古学、地質学、昆虫学など多様な分野にわたって調査し、その場所を創造したさまざまな力についてよりよく理解しようとする彼女の試みを示していた。調査を進めるうちに、その場所が過去において核実験場として使用されたことを発見し、そのため、その土壌は多様な半減期を有する放射性物質によって汚染されていることを知る。これにより、アメリカにあるこの場所は日本という場所、特に第二次世界大戦におけるヒロシマおよびナガサキの原爆とつながっていく。「ツル」の意味も、日本の皇室と鶴の関連性という観点から、有名な玉音放送との関連で新たに付加された意味合いを持つこととなった。このように「場所」は、狭く個人的な意味合いから理解されるのではなく、あるいは単にバイオリージョナル(生態地域的)な意味合いからの理解さえ越えて、グローバルな現実および世界史を包含する構築物として理解されることが示された。



閉会の全体会においては、Jonathan Bate (University of Liverpool)が、*The Song of the Earth* から何編かを選択して朗読し、その後Bath Spa University のGreg Garrardと対談した。壇上の公開対談は、生き活きとしてふたりの豊かな知識を感じさせ、同作品に影響を与えている哲学的諸課題について理解する糸口ともなった。対談時間の多くが、ハイデッガーを用いたことについてのディスカッションに当てられ、ナチスドイツのヒトラー政権時代に教えられまた推賞された哲学を用いることの困難さが語られた。本大会の最終クライマックスは、英国初のエコクリティシズム・アンソロジーである*The Green Studies Reader* (Laurence Coupe編)



の紹介であった。

全体会の多彩さからも伺えるように、この大会には大西洋をはさむ英米両地域の双方から大変興味深く刺激的な発想が集結して、将来我々が取り組むべき新たな課題への道を指し示す場となった。エコクリティシズムは、一つの分野として、アメリカ文学の枠組を超えて急速に発展してきたが、今や文学そのものの枠組さえ越えて、映画、美術、自叙伝等々の領域へ拡がり、また単に人の住む地域の外にある場所としての自然という概念をも超えたように思う。文学およびノン・ヒューマン世界の研究に携わる者にとって、まさに好機到来といえるのではないだろうか。

(翻訳 中西須美 名古屋大学・院)

2000年度ASLE-JAPAN京都大会報告

第6回全国大会を振り返って

西村頼男 (阪南大学)

昨年10月15日、16日の両日、京都市において開催された。アメリカ文学会と別会場であるために、不便もあったかと思われる。

15日の総会は代表の交代および役員改選という大切な議題があった。ここで、設立準備の段階から長い期間にわたってASLEの組織発展・教化のために尽力された野田研一氏に改めて謝意を表したい。総会の後は5つの発表を聞いた。分野はアメリカ文学、イギリス文学、言語学、日本文学と多岐にわたっており、ASLEの幅の広さを実感することができた。

15日夜の懇親会の会場は大会会場と同じ京都教育文化センターであったために、移動もスムーズであった。その分、参加者が交流する時間が十分であったと思われる。北海道から沖縄に至る全国から参加者があり、アラスカからもあった。2次会もいつも通りに盛会であった。

16日のシンポジウムのタイトルは「国立公園の自然と里山の自然」であったが、報告者のひとりが参加できなかったのは残念であった。午後の特別講演は長良川河口堰反対運動を開始された天野礼子氏の話であった。日本の環境政策について考える必要性

を改めて考えさせられた。

エクスカージョンとしては16日の夜、大原の里に宿泊して、17日比叡山に約2時間かけて登った。

今大会は加藤貞通氏(名古屋大学)と小生の担当であったが、プログラム作成は加藤氏に全面的にお願いした。反省点としては、広報活動が不十分であったこと、および、出版社と連絡がとれなかったことである。

ASLE京都大会に参加して

岩井洋 (酪農学園大学)

昨年10月15・16日に、京都教育文化センターにて行なわれたASLE第6回全国大会に関する感想を述べさせていただきます。

先ず、手前勝手になりますが、私は、ドイツ詩人F. ヘルダリンの自然観研究のためにドイツに留学したことがあります。その際に、日独の自然風土の違い、さらに自然風土と文化との相違を強く実感いたしました。こうして一念発起し、比較環境文化論を志し、日本の文学・歴史・思想・芸術を資料としての、日本的自然観の研究に現在至っております。

ここ7年間ほどこの研究を続けておりますが、なにせ環境という言葉は、日本では未だに自然科学

的視点での研究に限定され、人文科学は、環境科学とはもっとも遠いところに位置すると判断されています。そのために私は、環境文学の研究などは、環境研究に対する冒涇だという扱いを受けたことも何度かありました。

こうした私にとって、ASLE発足のニュースには大変感動し、さっそく当時金沢大におられた野田先生に連絡させていただき、ASLEとの縁がこうしてできた次第です。

そのため、これまでのASLEの大会では、私は研究上での多くの良き刺激を受け、幅の広い知識をいただき、非常に得るものが多かった次第です。しかも、ASLEの会員の方々が、私のような異分野の研究歴を持つ人間をも暖かく受け入れてくださり、その点でも心から感謝いたしております。

今回の京都学会においては、一段と多様な研究発表と現実的運動に関する生き生きとした発表が行われ、従来の、研究者だけが作るギルド的閉鎖空間での閉塞的な研究発表会ではなく、現実にも門戸を開けた活気ある雰囲気になり、大いなる刺激を得ることが出来ました。これはASLEならではの、誇って良い姿勢だと考えます。

しかし以前から感じ、とくに今回の学会でその感を強くしたのですが、ASLEの発表会では、「環境」と「文学」とが一緒にいるが、両者の触れ合うところがなかなか見付からないのではないのでしょうか。これは私自身の検討課題でもあるのですが、「環境」と「文学」との関連について

の確認やそのための意識的取り組みも必要な時期を迎えつつあるのではないのでしょうか。ASLEの持ち味としての、現実との有機的関係をさらに育むためにも、それは必須な検討課題だと考えます。

現在のASLEには、そのための十分な蓄積は出来てきており、それが可能だと考えます。そのことが、ひいては、人文科学的観点からの環境研究の定義および価値の確立につながり、環境文学が環境研究の一翼を担うものだと、つまり、日本において人文科学からの研究が環境科学として位置付けられ、その観点からの研究が、21世紀の時代の本当の市民権を得ることにつながるのではないのでしょうか。

以上のような点につきましては今後私ながらも研究し、ASLEの一層の発展にささやかな寄与をいたしたいと思っております。京都大会も私の意を強くしてくれました。感謝申し上げます。

全国大会に初参加

喜納育江（琉球大学）

10月でも摂氏25度を越える沖縄からやって来た者にとって、ひんやりとした秋の京都は心地よい異文化に感じられた。初参加になる今回のASLEの大会でも、そんな「心地よい異文化」の風を感じていたような気がする。刺激的な発表の数々や特別講演に加え、とりわけ私が興味をそそられたのは、シンポジウム「国立公園の自然と里山の自然」だった。そこで提示された「里山」のイメージはやはり亜熱帯の島における日常の風景とは異なるもので、生態地域的差異と、その認識の差異として生じる「日本の里山」の姿に、しばし立ち止まらずにはいられなかった。しかし、私にとって「差異」として感じられたものが、フロアの人々にはわりと違和感なく共有されているような雰囲気があって、そこがまた興味深かったのも事実である。

エクスカーションで比叡山登山をしたときも、「こういうのは沖縄にはない」という感覚に心身が小躍りしていた。（あまりのはしゃぎように発揮される「オキナワなもの」に、他の参加者の方々は奇異なものをお感じになっていたかもしれない。）オキナワの山にどんぐりはないし、山猿の声も聞かないし、一斉に紅葉する森はないし、第一、オキナワでは乗用車で移動がdoor to doorレベルなので、おそらく全国一「歩かない」民の一人として、私もその貧しい脚力で皆様のご慈悲におすがりする羽目になった。（お世話になった皆様へはこの場を借りてお礼申し上げます。）

今は沖縄で、真っ青な海と、陽光を受けてきらめくガジュマルの深緑と、2月にして咲ききっている寒緋桜を眺めながら、あの学会で認識したこと、エクスカーションで体感したものを反芻しつつ、「沖



縄の里山」がどう定義できるかを考えている。同じ行政区として絡め取られる一方で確実に存在する「多様性」の現実をひもとくひとつの切り口として、「里山」の概念は有用であるように思える。それは、沖縄がこれまで構築してきた文化的アイデン

ティティと、これから構築せねばならないエコロジカルなアイデンティティの接点を検索する試みともいえ、そのような視点を促してくれたあのシンポジウムに改めて感謝している。

GLASA学会報告：Nature, Culture, Environmentalism

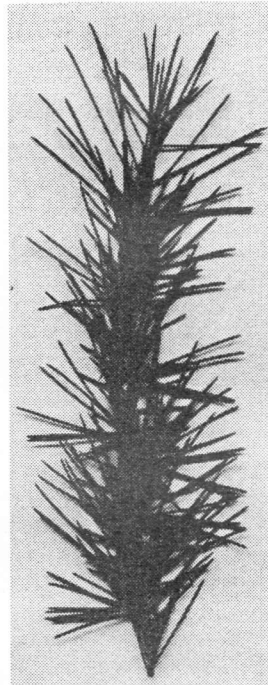
上地 直美 (Indiana University at Bloomington・院)

"Nature, Culture, Environmentalism"のテーマで、The Great Lakes American Studies Association Annual ConferenceがOhio州のYoungstown State Universityで開催された(2000年4月7日-9日)。今学会の趣旨が、Natureに関する現代的解釈に置かれていたため、発表者の多くがASLE-USのメンバーだった。

keynote speakerの一人、Noel Sturgeon (Washington State University)は、"Nature, Culture, and Justice: Environmentalism in a Transnational Context"と題し、環境教育のために、テレビや映画などのポピュラーカルチャーを利用することの重要性を論じた。講演では、"The Lion King"などのシーンの幾つかをビデオで紹介し、ヨーロッパの類似のアニメや、日本の『ジャングル大帝』にも言及した。また、環境教育に貢献した優れた作品として、日本の『もののけ姫』を紹介した。

もう一人のkeynote speaker、David Miller (Allegheny College)は、"Repercussions of the Sublime: What Can Contemporary Environmentalism Learn from the American Landscape Tradition?"と題し、19世紀の絵画をスライドで紹介しながら、"the sublime"の再考を試み、議論を現代の環境問題へと発展させた。彼の"the sublime"の解釈は、Edmund Burkeの「"the sublime"とは、Natureに対する畏怖、畏敬の念より生じる感情で、『美』の一環というより、むしろ『美』に対岸する位置にある」という観点から出発した。中盤は、Natureに関する新理論を中心としたWilliam Cronon編集の*Uncommon Ground*からの引用を軸に展開し、後半は、Thoreauが、"the sublime"を新しい観点から解釈した例を取り上げた。

ASLE-USのTreasurerを長年務めたAllison Wallace (Unity College)は、大学の授業で、どのように『食』に関するテーマを環境教育の一貫として教えるかを実体験を交えて"The Planet on Our Plates; or, Food in the Nature-and-Culture Classroom"と題し、スライドを用いて講演した。MillerとWallaceは、朗読原稿掲載を快諾し、送稿してくれたので、印象に残った部分を抜粋する。



*Millerのスピーチの趣旨と概要

この講演の目的は、19世紀のアメリカの風景画が、どのように"Nature vs. Culture"の図式に拘わったのかを考察し、現在の環境問題に一石を投じることである。特に、"the sublime"の観念を再考することに焦点を当て、Thoreauの試みを論じてみたい。

Slide 6 (Thomas Cole: The Oxbow)

絵画の中の画家自身が、去り行く嵐の中で、ずぶ濡れになりながら、Natureに対する畏怖の念に茫然として、典型的なsublime gestureをとっている。"Nature vs. Culture"を表現した代表的な19世紀の風景画。

Slide 11 (Jasper Cropsey: Sailing)"the sublime"のBiblical and Gender metaphor

19世紀は、wildernessに関する聖書的な考えに変化をもたらした時代である。すなわち、神による選ばれた人々が直面した混乱と絶望の場所という観念から、この世の復樂園というイメージに。*Uncommon Ground*の中で、Crononは、この考えを現代のenvironmental movementと結びつけ、"Nature vs. Culture"の構図を打破する道を探り、Carolyn MerchantはNatureのcommodificationと資本主義や科学とを結びつけ、キリスト復活の話の中での女性性

としての受動的Natureの役割に興味を示している。

Slide 20 "the sublime"とソロー

"the sublime"の観念は、究極的にソローのWalkingに対する考えに結びつく。ソローは、"Walking, or The Wild"の中で、森を歩くことで心と身体を一体化し、ひいては、wildernessとsocietyの融合を模索している。

*Wallaceのスピーチ

Slide 5 『食』と農業との関係

Long before the acts of meal preparation and consumption take place, great numbers of other people-unbeknownst to most of us-labor to make each meal possible. Out of sight and out of mind, too, remain most of the nonhuman creatures--including the billions that make up a healthy soil--that every hour yield their lives to the demands of agriculture.

Slide 8 『食』に関する倫理と流通との関係

As long as all these relations remain virtually invisible, they can be manipulated with relative freedom by a corporate ethos focusing on economic values to the virtual exclusion of all other values. The title of this course may imply that food ethics are separable from food ecology and food economics, but in fact ethical considerations underlie all others-and my primary aim with this course is to render visible for students this basic, inescapable reality.

Slides 11, 12 授業での使用テキスト

Margaret Visser's *Much Depends on Dinner*; Deanne Curtin and Lisa Heldke's anthology, *Cooking, Eating, Thinking*; Wendell Berry's *The Unsettling of America*; and John McPhee's *Oranges*. On reserve in the library I put numerous other works, some of which I excerpt for required reading and others of which become resources for student research.

Slide 16 (eroded field) 緑化と工業化された農業により浸食された農地

We can fast-forward to modern times and use grain crops as an entry to a discussion of agriculture's ecological toll, especially via the Green Revolution. Ecologically, industrial agriculture has resulted in severe soil erosion, water pollution, aquifer depletion and soil salivation (via irrigation), and expenditures of petro-chemical energy far outweighing the caloric energy yielded by food items themselves.

Slide 18 肉食とビタリアニズムに関する議論

At Unity College, meat-eating and vegetarianism take on a special twist when we devote one class period to hunting: it's a red-flag issue on our campus. This is also the point in the course when we ponder the ontological strangeness of eating-its requirement that we appropriate other life forms in order to perpetuate our own forms, our own lives as embodied beings.

Slide 20 農業と流通との関係

We examine the typical share of each food dollar taken by various constituencies of the food industry in contemporary America (on average, farmers get the lowest percentage, distributors the highest). We look at 20th century trends-noted briefly in the course's early discussion of the Green Revolution-in farm ownership (away from families and toward corporations), farm labor (away from U.S. citizens and toward legal and illegal aliens or, of course, machines), and food prices (fairly steady for consumers, but for farmers badly outweighed by increases in overhead costs).



第11回エコクリティシズム 研究会報告

城戸光世（広島大学非常勤講師）

2000年11月12日、広島大学に於て第11回エコクリティシズム研究会が開催された。今回は、中四国、九州を始め遠く東北からも参加者が集まった。取り上げた本はLeslie Marmon Silkoの*Storyteller* (1981)と、William Cronon編*Uncommon Ground: Rethinking the Human Place in Nature* (1996)の2冊である。

*Storyteller*は、シルコーの代表作『儀式』とは異なり、フィクションにもノンフィクションにも分類不可能な作品で、小説や詩、写真、自伝風スケッチ、さらには先住民の民話や神話など、様々な要素がコラージュのように加えられ贅沢に織り成された「ジャンルを越えた作品」だと言われる。先住民文学に詳しい横田由理氏によれば、この作品は「蜘蛛の巣のようにテーマが放射状に紡がれ、相関関係の中でネイティブ・アメリカンの宇宙観を描きだした」、円環的な構成をもつ作品である。同じような

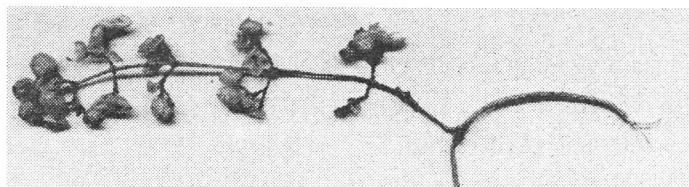
ストーリー展開の頻出、違う名前でも幾度も登場する Yellow Womanを始めとする人物や神話など、先住民文学に馴染みのない筆者など、時に戸惑うこともあったが、普段「普通の」形態の作品ばかり読んでいる読者には、目新しく興味深い作品だと思われるはずである。

一方クロノンの *Uncommon Ground* は、著名な歴史家や科学者、批評家による「環境保護問題の再評価」となる話題の論文集である。その内容は、自然表象に無意識に織り込まれる「パラダイス」の概念を扱った章や、議論されることの多いエコロジ的な言説や環境保護運動の様々な側面を異なる観点から論じた章、自然の概念の見直しを図る章など、五つの章計16の論文より成り立っている。編者であるクロノンは、「物理的環境への脅威がこれまでになく大きくなっている今、自然における人間の位置について抽象的な疑問を投げかけるよりも、その障害を乗り越える必要があると思いたくなるかもしれない。しかしその

ような問題と向き合わずには、どんな障害を乗り越えるべきか知ることは難しいし、一緒にそれを乗り越えるよう大勢の人間を説得することはさらに困難だ」と述べ、「自然」について再考する豊かな視座を提供している。我々はその16の論文のうち12本を、各自分担発表して読んだ。

今回は、遠く東北より参加して頂いた東北大学院生熊本早苗氏に、「Annie Dillardの作品における「半透明」(translucency)に関する一考察: *Teaching a Stone to Talk*(1982)と*Holy the Firm*(1977)を中心に」と題して、非常に意欲的で興味深い研究発表を行って頂いた。朝10時から午後5時近くまで、昼食を挟み合計6時間にも及ぶ長時間の研究会で非常に勉強になり、滅多に会えない参加者同士話す機会も持てる。次回は8月初旬頃に開催予定、是非大勢のASLE-JAPAN会員の方に参加して頂ければと願っている。

問合せ先: shokoi@hiroshima-u.ac.jp



書誌情報 1

(研究書) 長崎大学文化環境研究会編『環境と文化—(文化環境)の諸相』(九州大学出版会、2000)

===長崎大学環境科学部の「文化環境研究会」スタッフによる共同研究の成果。環境をめぐる自然科学からの眼差しと、文化科学の眼差しとの交点に〈文化環境〉論を構想・設定しようとする意欲的な試み。「環境にかんする諸問題への文系基礎学からの回路を開拓する試み」と定義されている。著者の一人松田雅子さんは英文学研究者、ASLE-J会員です。(野田)

(雑誌特集) たばこ総合研究センター『談』no.64 特集「視覚論」再考(2000年10月)

===J.J. Gibsonの生態学的視覚論を初めとして、アフォーダンス理論など視覚論については注目すべき理論展開が見られる。この特集は、こうした視覚論への次なる展望を提示しようとしている。前号の特集「移動の記述法」も大変興味深かったが、次号では「触れる」が特集されると予告されている。no. 59は「匂い・香りの身体現象」。この雑誌はまったく目立たないが、時代の思潮を先取りしながら、特集を組む編集

者の眼力がすごい。少なからずネイチャーライティング的な問題と重なる特集が多い。以前、岡島成行、北沢方邦、野田研一を招いてアメリカ論の座談会を組んだこともある。(野田)

(ノンフィクション) Philbrick, Nathaniel. *In the Heart of the Sea: The Tragedy of the Whaleship Essex*. New York: Viking, 2000.

===最近Herman Melville関連、とくに*Moby-Dick*や難破船に関わる一般読者向けの出版が相次いで注目を集めているが(例えばSena Jeter Naslandの*Ahab's Wife*, Tim Severinの*In Search of Moby Dick*, 等)その中でも権威ある文学賞を受賞し、評価の高い作品の一つ。Philbrickは難破船*Essex*について歴史的な考察を中心に、クジラの生態学から、捕鯨、カニバリズムの問題など、明らかに作品*Moby-Dick*を意識した形でストーリーを展開していく。何よりエコクリティシズムとの関連で興味深いのはPhilbrickが自身の経験とそのナラティブに重点を置きつつMelvilleやMelvilleに影響を与えたOwen Chaseの経験を再考察してしているという、ナラティブスカラーシップ的なアプローチであろう。(山城)

「自然と文化」プログラム

デイヴィド・ロバートソン
(カリフォルニア大学デイヴィス校)

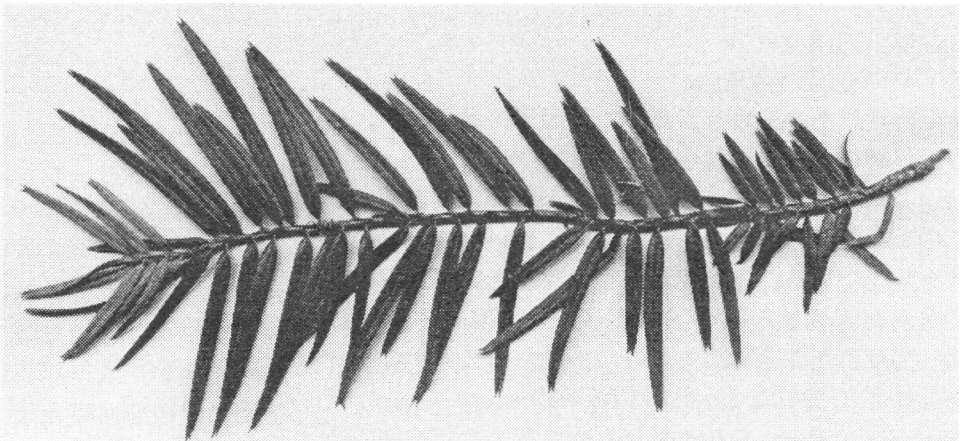
1988年4月、カリフォルニア大学デイヴィス校の人文学者のグループがカリフォルニア州シエラネヴァダ山脈のサン=フアン・リッジにあるリング・オブ・ボーン禅堂に集まった。私たちのホストであるゲーリー・スナイダーの所有地にある禅堂である。みんな自然に関心を持っていて、カリフォルニア大学デイヴィス校のカリキュラムに自分たちの環境への関心をどう反映させるかを話し合うために集まったのだ。デイヴィス校の新しい学長テッド・ハラーも私たちの取組みを強く支持しており、彼はその集まりへの出席に同意した。私たちは最初からカリフォルニア大学デイヴィス校事務局の熱烈な支援を得ていたのだ。

数時間の議論の後、私たちは、科学と人文科学との交差点に知的領域を確立するような新しいプログラムを文理学部で開設するために尽力することを決意した。その新しいプログラムの名称についてはなかなか合意が得られず、その午後1, 2時間は風変わりな奇抜な名前を提案して過ぎた。結局、「自然と文化」で落ち着いたが、この選択には皆あまり満足していなかった。この語句自体が、私たちの誰も信じていない自然界と人間界の二元論そのものであるように感じられたからである。実際、私たちの誰もが、西洋文化にありがちなこの二元論をはじめとする様々な二元論的発想に異義を唱えなくてはならないと思っていた。しかし、その午後の話し合いではそこまでが限度であり、結局何ら大きな支障のないその名称で落ち着くことにした。

4月のあの日に決まったことで重要だったのは、次の集まりからは、理科系と人文系からできるだけ同数の代表者が出席しなくてはならないということだった。人文系と理科系の学際的なプログラムを、一部の人文学者だけで開設しようというのは言うまでもなく出すぎた態度なのである。その

デイヴィド・ロバートソン教授はカリフォルニア大学デイヴィス校でアメリカ文学を教えている。特に、ゲーリー・スナイダーや他の同僚たちと協力して創設した「自然と文化プログラム」(Nature and Culture Program)の指導者的存在で、ネイチャーライティングの研究者として全国的に知られる存在である。著書に*West of Eden* (Wilderness Press, 1984)や*Real Matter* (U of Utah P, 1997)などがあり、生態地域主義の実践でも知られる。

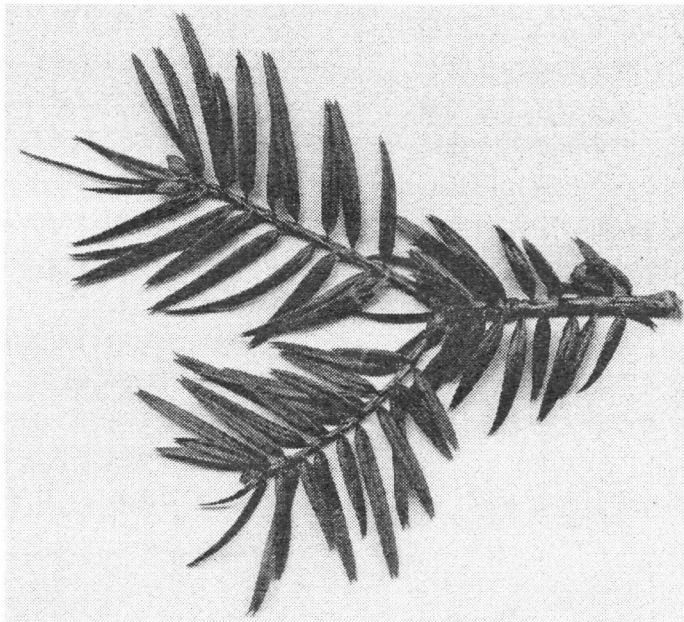
本稿は、Nature and Culture Programを日本に紹介して欲しいという依頼に応えたもので、日本の大学における新しいカリキュラムを考える上で参考になるはずである。(山里勝己)



後2年間に渡り、多くの様々な委員会の承認を得て、この新しいプログラム実現に向けての専門委員会が発足した。専門委員会は、微生物学、動物学、植物学、環境科学と政策、言語学、英文学、比較文学、そして歴史の教員で構成されていた。

「自然と文化プログラム」のカリキュラムを確立し、学位を授与するには3つの段階を経なくてはならなかった。まず、新しい3つのコースが承認された。第2段階は副専攻の承認であった。デイヴィス

校評議会がコースを承認すると、学部長はそれらを副専攻として認めることができる。この最初の2歩をデイヴィス校のキャンパスで達成するにはさほど時間はかからなかった。しかし、新たに主専攻を設けるにはカリフォルニア大学総長の承認が必要である。総長のサインを得るために6年間熱心に、粘り強く働きかけ、1994年9月に承認を得た。おもしろいことに、禅堂での小会議からオークランドの総長室までの道程で唯一の大きな障害は大学の教員だった。デイヴィス校事務局や学生たちは首尾一貫してプログラムの目的と価値を熱心に支持していた。ところが、デイヴィス校評議会の教育施策委員会は、プログラムに反対だった。プログラムのゴールが壮大すぎることに、コースの焦点も定まっていな



いこと、その結果分野的に広範囲にわたる教育が提供されることになり、専攻学生の卒業後の就職が保証できないことなどがその理由だったが、委員会の指導者と構成員に大幅な改変があってようやく承認を得ることができた。

「自然と文化プログラム」がスタートした頃、カリフォルニア州の経済は深刻な下降期にあり、カリフォルニア大学のあり方が、州の納税者の多くに支持されていない時期だった。過去12年間非常に多くの人々にどうやって実現へこぎつけたのかと訊ねられたが、その度に私はいつも3つの理由を唱えている。まず何より重要だったのが、国際的に著名な人物ゲーリー・スナイダーが私たちと共に闘ってくれたことである。2つめは、ポスト中等教育向上基金（FIPSE: the Fund for the Improvement of Post Secondary Education）から相当な額の助成金を確保することができたことだ。しかし、大事なのは助成金に関わることだけではなかった。FIPSEの援助のおかげで、私たちの取り組みは全国的に知られるところとなったし、信頼の置ける全国的な機関から太鼓判を押されることになった。3つめに、このプログラムが学生のニーズに応えるものであるということを大学側がカリフォルニア州市民に対して示さねばならなかった時に、私たちスタッフが、大胆さと想像力を発揮し得たという事実がある。

「自然と文化」の3コースは全て理系と文系の研究者によるチーム・ティーチングである。自然と文化1（NAC 1: Nature and Culture 1）は、科学と人文科学の裂け目に現れる観念や問題を紹介する入門コースである。このコースでは主に、物語（ナラティブ）と比喩という概念を援用することで、進化論とダーウィン説の影響下で書かれた文学との関係がどのように理解できるかという内容を扱った。それから後は、地質学と物理学の両方が基礎を提供してきたが、担当する講師陣の構成によってトピックは様々である。

NAC180は専門課程の野外研究コースで、私は4年間それを教えてきた。

そのうち初めの3年間のパートナーは魚類生物学者ピーター・モイルで、昨年の秋は、カリフォルニア北部海岸の山脈に見られる蛇紋岩丘について研究している空間生態学者（spatial ecologist）、スーザン・ハリソンだった。私たちは、学生たちを自然界と人間界が複雑に交わっている場所へ8日間連れて行く。過去3年間に私たちが訪れたのは、金鉱でもあり、カリフォルニア大学の自然保護区域でもあるマクラーリン

鉱山跡だった。そこはデイヴィスの約60マイル北にある。マクラーリン鉱山を所有しているホームステイク・マイニング・カンパニーは、区域内への教育目的の立ち入りの権利を、カリフォルニア大学に許可することを現在進めている。その所有地には地面に巨大な醜い穴があるばかりでなく、蛇紋岩地層が広い範囲にわたって露出しており、初期の蛇紋岩層に色とりどりの珍しい花が生育しているのが見られ、「自然と文化」の野外研究にはまたとない格好の場所である。

このコースは科学と人文科学を織り交ぜているのが特徴である。俳句を詠んだり写真を撮ったりという創作的な課題が主であるが、その大部分において、学生たちがそれらの課題と科学とを切り離すことがないように指導している。このクラスのもう一つの特徴は、現実世界での実用性を重視していることである。例えば、学生たちは、鉱山

地帯から流れ出て彼らがテントでキャンプ生活をするコア図書館の敷地まで流れ込んでいるハンティング・クリークで、魚の観察調査を行う。彼らの収集した情報は、20年ほど前鉱山が開いた時以来科学者たちが長年にわたり記録してきたデータベースへと入力される。それに加えて、学生たちは俳句を詠んだり、データ収集の過程や場所自体の写真を撮ったりする。そしてその日の夕べにみんな集まって（写真は現像に1日かかるのでその時はまだ手元にはないのだが）、学生はデータを発表し、分析し、俳句をよみあげるのである。

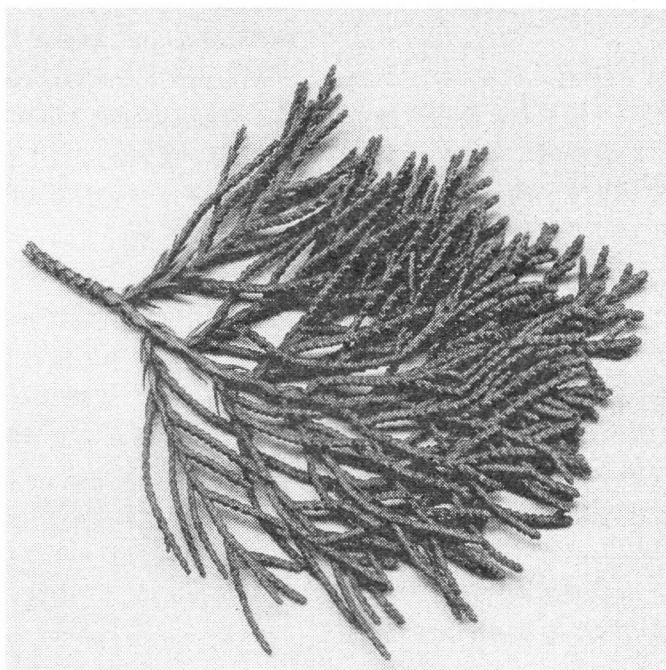
ほかに、金鉱の歴史やその地域の地質学的歴史についての予備知識の講義と同時に、地元の4,000フィートの火山に登ったり、土地所有者に会ったり、連邦及び州の土地管理局の職員と話したり、儀式的活動に携わったりといったようなその他の胸が躍るような体験をする。そのような活動の中で最もうまくいったのは、英文学部のローリー・グローバー博士によって造られた丘の斜面の迷路を歩き回ることだった。また、グローバー博士は夜のライティング・エクササイズもいくつか担当する。

通常、学生には学期中の課題が2種類与えられる。その1つは現代の大学で行われている科学を模倣するものだ。たいていの場合、グループ単位でやるプロジェクトで、科学的な論文執筆あるいは助成金申請の企画書の製作という形式がとられる。もう1つは普通もっと個人的なもので、詩人や芸術家のやり方をまねたものである。グループ・プロジェクトの方は、公有地を管理する政府機関に開示できるようなものであるのが理想的なのだが、この目的まではなかなか達成することができない。これらは、プロジェクトとしては大変満足のいく成果である。しかし、学生たちのグループにとって1学期（1クォーター：10週間）でそれぞれの研究を整理・統合するのは難しいため、最終原稿はあまりまとまりがなく、実際に政府機関に提出できるというほどの出来ばえにはならない

ことがある。

全般的に、個人プロジェクトの方がうまくいっている。学生たちは、書き物と芸術作品（ふつうは写真）を2通りの形で公衆に発表することになっている。1つは、デイヴィスの街での芸術発表の主な場であるデイヴィス・アート・センターでの展示・朗読である。作品をこの展示会で発表するのは、選択ではなく、コースの必須事項である。視覚芸術作品を展示したくない学生は、自作の詩や物語を貼り出してもいい。展示会は、両親や友人、「自然と文化プログラム」の他の学生や教員ばかりでなく、一般の誰もが見に来ることができ、事実、地元のメディアで宣伝される。この催し物の夕べでは詩や散文の朗読もおこなわれる。

このアート・センターでの展示に加えて、学生たちは自分たちで作るパンフレットのために書き物や芸術作品を提出することになっている。これはキャンパスにある教育資料センター（Teaching Resources Center）が支援している。学生はそのパンフレットの編集者に作品を提出するのだが、編集者自身もクラスの学



生なのである。編集者は作品を集め、パンフレットに載せるものを選び、修正を提案し、レイアウトを考える。最終的に出来上がるのはとてもみごとなものである。私の個人的な意見だが、このように教室外の観衆に対する責務を強調していることが、この野外研究コースにおける学生の学びの質を高めている大変重要な要因であるように思われる。

自然と文化プログラムは際立った成果をあげてきた。専攻の学生はずっと増え続けているし、地域でも全国的にも高い評価を得ている。この最初の10年間は確かに問題がなかったわけではないが、学生と教員は高い士気を維持してきた。物事がばらばらのようできて実は複雑に相関し合っているこの世界で、「結びつけ、関連づける」教育だけが、学生にそのような世界へ出ていく準備をさせてやれるのだと私たちは実感している。（翻訳 豊里真弓）

書誌情報 2

(アメリカ風景画・文化論) B. ノヴァック、黒沢眞里子訳『自然と文化—アメリカの風景と絵画1825-1875』(玉川大学出版部、2000)

==美術史家Barbara NovakのNATURE AND CULTUREの翻訳です。アメリカ風景画論にして、アメリカ文化論になっている名著。日本におけるHudson River School研究に一層の弾みがつくものと思います。訳者黒沢さんはアメリカ研究者、ASLE-Japanの会員です。(野田)

(ノンフィクション) 加藤則芳『日本の国立公園』(平凡社新書、2000)

==本書は、日本におけるナラティブ・スカラーシップの実践だと思えます。資料を駆使した綿密な論考と同時進行的に、自然の中に身を置く著者の活動の様子が豊富に盛り込まれています。前作『ジョン・ミューア・トレイルを行く』(平凡社、1999)同様、思わず出掛けたくくなります。(高橋守)

(ノンフィクション) Terry Tempest Williams. *Leap*. New York: Pantheon, 2000

==『デザート・クアルテット』から5年を経て発表された本書には、このネイチャーライターの"Leap"がいくつか読み取れる。まず場所のLeap。90年代半ば、ウィリアムスはユタからスペインへ移り、プラド美術館に入り浸ったときに双眼鏡片手にヒエロニムス・ボッシュの『快樂の園』を観続けていたと

いう。絵画というよりは<自然誌>として。観る者の想像力を掻き立ててやまない『快樂の園』にアメリカ西部ウィルダネスを重ね合わせ、アートのしなやかな強靱さとウィルダネス保護との交錯を探究する本書は、ウィリアムス特有のエロティックな自然観のLeapをうかがわせもする。さらに、自らが信仰するモルモン教と環境保護思想との接点を見い出そうとするLeap in faithも暗示されているようだ。

(結城)

(研究書) Mazel, David. *American Literary Environmentalism*. Athens: Univ. of Georgia P, 2000

===William Crononの*Uncommon Ground*やMichael E. Souleの*Reinventing Nature?*に代表されるような、例えば構築主義者と本質主義者の間の環境論議は未だエコクリティシズム研究においては重要な問題をいくつか提示し続けているが、Mazelはその論議に一つの答えをだそうとする。Judith Butlerの*Bodies that Matter*の中での立場に依拠しつつ、アメリカの国立公園設立過程にみる風景論、ナショナリズムとウィルダネス、そしてエコクリティシズム論はもちろん、様々な角度から文学的に環境思想を考える。扱う作家もJames Fenimore Cooper, Theresa Yelverton, Znita, Bill McKibben, Clarence King, Rebecca Solnit, 等、これからのエコクリティシズムの方向性と広がりを感じさせる。(山城)

【書評】

トーマス・J・ライアン著 村上清敏訳

(英宝社、2000年)

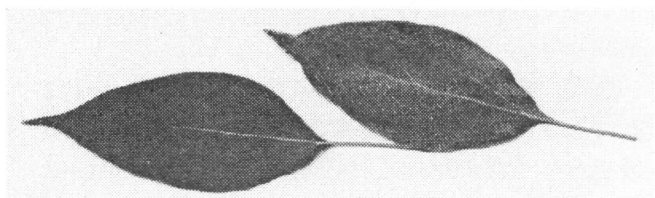
『この比類なき土地——アメリカン・ネイチャーライティング小史』

アメリカン・ネイチャーライティングの源流に遡り理解する

加藤 貞通

待望されていたThomas J. Lyon, ed., *This Incomperable Land: A Book of American Nature Writing* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1989)が訳出された。原典を構成する第1部「歴史」、第2部「アンソロジー」、第3部「研究書誌」のうち第1部「歴史」のみを抄訳したものであるが、アメリカン・ネイチャーライティングのエッセンスを凝縮

した第一部の論考だけでも十分訳出に値する。ライアンが寄せた日本語版への序文も新鮮である。確かにネイティブ・アメリカン他のマイノリティーの視点や文学理論、またノンフィクション以外のジャンルへの言及を欠くなどいくつか限界はある。しかしその限界は著者自身がよく意識していることであり、しばしば19世紀なかば、特にソロー以降の作品



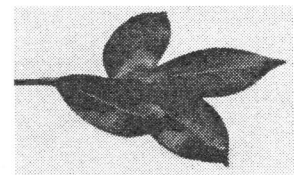
のみに偏りがちな研究者の注意を、W・バートラムやJ・クレヴクールなどアメリカン・ネイチャーライティングの源流に導き、歴史をふまえて現代のB・ロベスやW・ベリー等を照射する彼のパースペクティブは、限界を超えて有効な示唆を含んでいる。「アメリカン・ネイチャーライティングに表明される主要な文化的異説とは、個としての自己、自己の集合体としてのヒトから、外に向かって視線の焦点を合わせ直そうということだからである。視野の広がりとともに、根源的な提案がなされる。すなわち、環境とは、自然とは、人間としての積極的かつ十全な喜びの基盤だとする提案である。」というライアンの論点は、その後の様々なネイチャーライティング・環境文学研究の大方において重視されている。特に一考に値するのは第一章「ネイチャーライティングの分類法」に掲載された「自然に関する文学：スペクトル」と題する一覧表である。これは18世紀から20世紀までの26作品を、「野外ガイドおよび専門的な論文---博物誌のエッセイ---逍遙---孤独と僻地での生活---旅行と冒険---農場の生

活---自然における人間の役割」の7つの位相に割り振った表である。各自興味を抱いている作品がスペクトルのどの辺りに位置するかをチェックしてみるときつと面白いだろう。

トーマス・J・ライアンの文章は、含蓄の深い魅力的な文で、一種のツヤを帯びている。村上氏の和訳は、ロバート・フィンチ著『大切な場所---ケープコッドの四季』やヘンリー・ベストン著『ケープコッドの海辺に暮らして』などの訳業で練り上げた和訳術が発揮されており随所に工夫が見られた。

「[私たちは鈍感になってしまったので]世界を新たな生き物と見るためには、純然たる野生に、いわば、頭をぶん殴ってもらわなければならないってしまっただ。」(p.32)という箇所はその一例で、フィジカルなパワーを実感させる苦心の訳である。トーマス・J・ライアンは昨年A *Frank Waters Reader: a South Western Life in Writing* (Athens: Ohio University Press, 2000)を出版した。これも注目される。

ジョナサン・ベイト著 小田友弥/石幡直樹訳(松柏社、2000年)
『ロマン派のエコロジー---ワーズワスと環境保護の伝統』



イデオロギーからエコロジーへ---ロマン派研究におけるエコクリティシズムの貴重な貢献

伊藤 詔子

日本語版序文にあるように、本書は著者初めての「緑の文学批評の試み」で、タイトルも明白に示すように、1980年代ロマン派研究を席卷した感のあるニューヒストリシズムによるロマン派研究の代表格と見なされてきた、ジェローム・マガン『ロマン派のイデオロギー』が説いたマルクス主義的読みを批判し、今や赤から緑へと批評の視点を変換する必要を説き、イデオロギーにエコロジーを置き換えてワーズワス詩学の精緻で先駆的なエコロジカルな詩の体系を論じたものである。恐らくロマンティック・ネイチャーリズムの観点からしても、英文学におけるワーズワスの重要性はアメリカ文学におけるソローに勝るとも劣らない、中枢に位置する詩人である。従ってニューヒストリシズムによって不当に「貶められてきた」1797年以降の偉大な詩群に息づく自然愛から引き出された社会改革の提唱を先ず明らかにし、ついでワーズワス固有の場所の感覚、土地倫理、自然の権利などエコロジズムの予表的アスペクトを詳細に論じている。

序章で1980年代の政治的批評が如何に「テク

ストに不在のものだけに依拠して」テキストを歪曲しているかを述べ、ワーズワスが「歴史を抑圧し」「ブルジョア的イデオロギーを隠蔽した」と論じられ、ニューヒストリシストが好んでとりあげた「ティンターン修道院」や「廃屋」論を中心に検証する。そしてワーズワスが現在の環境意識のほぼ全容を予型的に抱懐し、ガイア仮説も、ワーズワスを中心とするロマン派の全体論的生命観のいわば対型としての「翻案」であるとする著者の立場を明確に示す。ロマン派の伝統は「肉食主義者のシェリー」、ドロシー・ワーズワスやシャーロット・スマスのエコフェミニズム、ジョン・クレア、エドワード・トマス、そして誰よりもワーズワスの系譜をナショナルトラストの思想的基盤へと高めたラスキンらにより滔々と継承されているとする。

第1章「永久に緑の言葉」("A Language that is ever green")のタイトルはクレアの「パストラル詩想」からとられている。毀誉褒貶の激しい『序曲』の解釈を、J.S.ミルの読み方に倣って漂白の人の瞑想に焦点を合わせ、如何にワーズワスが、先行する

パストラルの「唯我論の詩的媒体」的伝統を、「グラスミアの牧羊」の、自然愛と人間愛を結合させるエコロジカルな思想へと変化させたかが論じられる。

第2章「自然の理法」ではエコロジーの語源とその思想としての伝播過程を改めて辿り、軽視されてきた『湖水案内』を詩人と思想家と地理学者の複合的業績と見て精査する。「理想郷のような山間の共和国」としての湖水地方記述には、ナショナルトラストや国立公園の思想の胚珠があるとする。この点でもワーズワスは『野生の果実』など晩年のソローの仕事に類似していて筆者には興味つきないものがあったが、ベイトはアメリカのロマン派研究への批判の観点を貫き、科学が制度として樹立されていく中の詩人の役割など同時代の世界的動きには言及していないのが少し惜まれる。ビュエルが本書の影響力を「英国本国に限られたものだ」（「エコクリティシズム的謀反」、NLHエコクリティシズム特集）とした理由がこの辺にあるのかも知れない。しかし『逍遙』と並んで『湖水案内』という、ワーズワスのエコクリティシズム展開では欠かせないパスベクティブを樹て、既にカール・クロバーの *Ecological Literary Criticism* がロマン派に与えていた、“proto-ecological”としてのワーズワスの思想を明確にしている。『案内』は、同時代の自然史作品やその読者市場の観点からも、今後更にダイナミックに研究されて行くべきだろう。

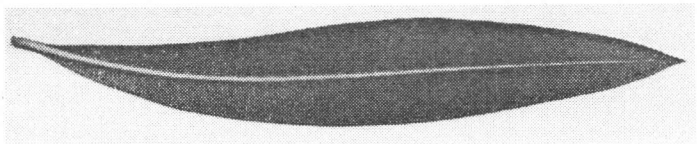
第3章「風景のモラル」は『逍遙』論で、アーノルド、コールリッジ、キーツ、ハズリット、ラム、ラスキンと相反する事も多いこの詩の評価を辿る。特に第2巻829-60までと『近大画家論』草稿にある想像力と崇高の理論の同質性の指摘は、両者の継承関係を考える上で貴重な論考を提供している。またここに環境倫理思想の胚珠も読みとれる。

第4章「土地の名付け」では碑文詩というジャンルからワーズワス、ヒーニー、トマスらの“sense of place”を論じ、名付けという詩的作業が土地を聖別化する過程を考察する。『抒情歌謡集』の中の一群の名付け詩は、自然にとけ込む「居住詩」と距離を置く「眺望詩」の中間にあって、詩人と自然を土地の歴史の中で架橋するという。ここには場所の感覚と哲学詩の構造形成の深奥な関係が仮定されていて、今後エコクリティシズムが明らかにするだろう多くの詩の内実を予感させる。と同時に名付けが必然的に持つ“appropriation”の保守性と新たなイデオロギー性は、更に吟味を要するかも知れない。

このように本書は単にロマン派研究の歴史に大き

【特集】鶴見書店テキスト 論議はどうなったのか？

ASLE-Japanメーリングリスト（ML）上で、2000年7月から2001年3月にわたって行われたASLE-J/文学・環境学会編（鶴見書店2000年3月1日発行）のテキスト『*Echoes of the Environment*』に関する論議はどうなったのか、学会活動の一部として記録を残しておくため、またML未加入の会員に一部始終をお知らせし、お考えいただくため、現在に至る経緯を特集します。最初に順を追って投稿メールの論議内容をおおまかに要約しておきます。次に本年1月に出版された監修者・編者からの「ご報告——鶴見テキストの最終処理」とそれに対する批判のメール1通、最後に今回ニューズレターの特集ページ向けに募集した追加コメントを掲載します。なお、この論議に関連する全メールをASLE-Japanホームページの[7.出版・研究活動]欄に記録として保管・掲載する計画は保留中と聞いています。ニューズレターでのメール全文掲載は無理ですのでご理解をお願い申し上げます。 <次ページへ>



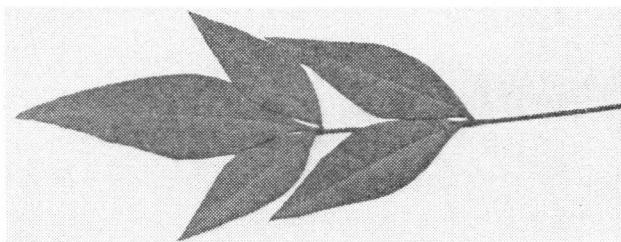
な足跡を残すのみならずエコクリティシズム全体にとって貴重この上ない貢献であり、博搜緻密な訳注や訳者二人の解説は情報量が豊かである。 *Studies in Romanticism* でもエコクリティシズム特集を編集するなど大活躍の学者ベイトの来日で始まったという、いわば日英共同プロジェクトである本書は、まさに地球時代の構えをみせる研究成果の一つといえよう。最後にビュエルの指摘にも繋がる苦言の一つ。本書には日本におけるネイチャーライティング研究やエコクリティシズムについての雑誌書誌もあとかぎで最新の2000年まで触れられているが、本書と関わりの深い書名を持ち、すぐ同じ出版社の仕事とも分かる『緑の文学批評——エコクリティシズム』（松柏社、1998）、及びその仕事を遂行した人たちの関連の本が何故か全く言及も参照もされていない。こうした一部のネットの無視は、エコロジーの原理からしても、先行する仕事に捧げられたエネルギーの損失を招くとあえて言っておきたい。

【鶴見テキスト特集】

【経緯 7~8月】 7月11日、加藤貞通氏から堂本暁子氏のインタビュー記事について「p.57の37-38行に、We need a system that evaluates all policies and carries out environmental assessments after projects are completed.とありますが、afterではなくbeforeではないでしょうか。」という質問が監修者・編者宛に出された。28日「編集者全員の統一見解は未だ出せない」旨、編者の一人から連絡があったこと、同時に個人的見解であろうとも編者のオープンな発言を望む旨加藤氏が投稿した。この後、結城正美氏、生田省悟氏、伊藤詔子氏と加藤氏の間で、計画アセスメントの重要性と堂本氏発言の関係、問題箇所はafterは奇異であるがbeforeでもやはり変であること、堂本氏の発言の日本語オリジナルを教えていただきたいこと、環境アセスメント法以外の要素が関係している可能性について、公共事業の再評価・事後評価制度導入の動き、およびミティゲーション（代償的影響軽減措置）に関して意見交換があった。

【経緯 9月】 編者の一人ブルース・アレン氏から、堂本氏は「we now need, IN ADDITION, to make post-project assessments AS WELL」の意味で述べた可能性があるとの指摘があり、加藤氏も賛同した。監修者岡島成行氏から、アセスメントは事前評価と事後評価があり、英文に問題があるとは思わないとの見解が示された。これに対し加藤氏は、不快感を与えたことについて詫びたうえで、事後評価についてテキストは説明不足であり、誤解を招きやすい旨述べた。

9月3日監修者・編者一同から回答が代理投稿された。概略次の通りであった：(1) 原典である*The Daily Yomiuri*ではafterとなっていた。(2) 読者と堂本氏から同新聞への質問、苦情等はなかった。(3) テキスト完成後、各対談者より質問、苦情等は受けていない。(4) 対談記録によると、堂本氏は「すべての政策についてチェックし、事業の後の評価もきちんとするシステムを作らなくてはならない。」と述べている。これは英文と同じ発言である。以上の諸事実が示すように、テキストの表現は適切で、問題はない。



【回答に添付された対談記録】 (堂本氏) 他の政策でも同じです。ダムや河川工事の環境破壊の問題にしても、これは洪水を紡ぐためのものですが、アセスメントをきちんとしていますとか、口ではうまく言うが、実際に地域全体の生態系をどう壊してしまうか、という問題についてはまったく調べていない。単に魚が何匹いなくなったというレベルではなくて、地下水や地形への影響などあらゆる基礎的な可能性をきちんとアセスメントしているかといえば、そうでもない。すべての政策についてチェックし、事業の後の評価もきちんとするシステムを作らなくてはならない。今ばらばらに行われている政策を環境面から束ねる政策がない。日本には今、ぜひそうした政策が必要です。

【英訳テキスト：P.57】

This is the same in other areas. With dam construction and river bank reinforcement projects, the government always trots out some excuse about how the projects are necessary to prevent floods, just to get environmental clearance. But they do not look at whether the project will harm the local ecosystem. They might check how many fish die, but they do not examine fundamental effects on underwater and geographical features.

We need a system that evaluates all policies and carries out environmental assessments after projects are completed. There is no general policy on the environment, which is what Japan needs right now.

この回答に対し、対談記録の発言には「事業の後の評価も」と「も」がついているから英訳文とは意味が大きく異なっており問題がある、つづく第2センテンスも、「今ばらばらに行われている政策を環境面から束ねる政策がない。」の趣意を伝えていない、注も不適切ではないか(加藤氏)、理解しづらい文言である(生田氏)、などの反論と説明の要請があった。

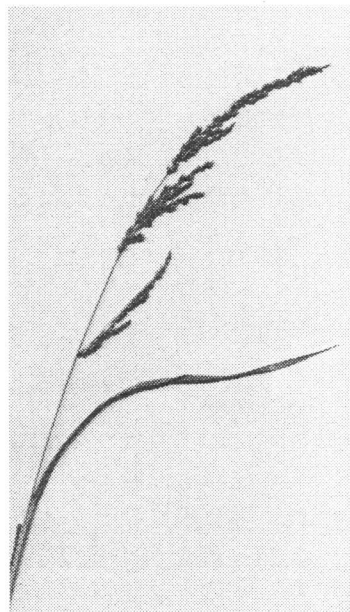
【経緯11~12月】 10月に関連メールは見あたらない。11月6日、加藤氏から37行以下の2つの英文と注は不適切ではないかとの疑問が再度表明され、学会編集のテキストであるからには責任者および一般会員の見解を伺いたいとの投稿があった。7日、高橋守氏から解決方法として、ホーム

【鶴見テキスト特集】

ページで英訳文と対談記録を公開し問題点の説明をする案と、説明文をつけた補遺をテキスト使用者に送る案とが提案された。15日、加藤氏から対談記録の和文の試訳と市民参加について投稿があった。16日、監修者・編者一同から「鶴見テキスト問題への最終回答」が掲載され、テキストについての質疑応答は今後「任意参加のML上ではなく、学会員全員に開かれた公的の場でいたします。そのような機会を設定していただければ、喜んで参加いたします。」また「問題とされる部分の意味は明瞭かつ革新的で意義ある提案として受けとめる」ことができ、何も問題はないとの見解が繰り返された。これに対し高橋守氏、伊藤詔子氏らから、「メーリングリストでの回答は今回で終わりいたします」という文言は乱暴であるから撤回してほしい、学会のコミュニケーション手段にかかわる基本的な認識を再確認すべきだ、メーリングリストによる自由な意見交換は重要であり有効だ、等の意見が出された。高田氏からMLは学会の問題を論ずる場ではない、役員会と総会で論ずべきだ等の見解が出され、これに関し議論があった。12月21日、堂本暁子氏から英文修正の要望と英訳文の提案を含む第1のメッセージが寄せられた。加藤氏は、堂本氏の要望に添って解決を図るよう提案した。石幡直樹氏、伊藤詔子氏から提案に賛意が示された。

【2001年1～3月】 1月17日、堂本氏の第2のメッセージと共に監修者・編者から「ご報告---鶴見テキストの最終処理」（別掲）が出され、本文の表現通りで問題はないとの見解が示された。18日、加藤氏から論議が昨年9月時点まで逆戻りした、これをもって学会の回答とみなすことは危険であるとの感想が投稿された（別掲）。その後、ニューズレター編集係から鶴見テキスト特集の企画と、追加コメント募集の呼びかけが出された。3月に入り、間違いによるMLへの投稿というハプニングがあったが省略する。

（有為楠）



【メーリングリストから2通転載します】

NO.1

Date: Wed, 17 Jan 2001

From: noda (メール発信者 高田氏; 野田氏代理投稿)

Subject: [aslej:01281] Fwd: 鶴見テキスト: 学会ML掲載のお願い

ご報告---鶴見テキストの最終処理

ML参加の会員の皆様へ

12月27日に、堂本氏の事務所より電話によるご説明と次のようなメール(資料1)がありました。メールの文面は至極簡潔ですが、その趣旨は現在の英文で堂本氏の意図は充分伝わるとのご説明でした。さらにまた、「お知らせ」(資料2)で触れましたご意見も頂きました。それに基づき監修者・編者で協議の結果、テキスト使用者の方々以下のような「お知らせ」をお送りすることに決定いたしました。

また、加藤先生から私たち監修者・編者に対して、言葉づかいに問題があったことへの丁寧なお詫びの言葉をいただいたこともご報告いたします。

2001年1月17日

監修者・編者一同

(資料1)

高田賢一様

*Echoes of the Environment*編集責任者でいらっしやいます高田先生に英訳をめぐる件につき、私どもの見解をお知らせいたしますので、よろしくお願ひ申し上げます。

英訳の修正について、私どもの方で検討した結果をお伝え申し上げます。英訳をめぐる、様々なご意見を頂戴致しました。心から御礼申し上げます。しかし、すでに印刷を経た現段階で、これ以上の具体的提案を私どもの方からするつもりはございません。

以上、お知らせ申し上げます。

堂本暁子事務所

(資料2)

2001年1月

お知らせ

厳寒のみぎり、先生におかれましてはご健勝のことと存じます。

2000年度テキストとして、鶴見書店より刊行されました*Echoes of the Environment*を使用いただき有難うございました。

さて、本テキスト所収の堂本暁子氏の発言をめぐって疑問を寄せられた方がおられました。先生におかれましても同種の疑念を抱いておられることもあるかと懸念いたしますので、質問の内容とそれについての説明をさせていただきます。また、同じような疑問を感じる学生諸君がおられるようでしたら、恐縮ではございますがご説明いただければ幸いです。

問い合わせがありましたのは、57頁37行目から39行目の文章、"We need a system that evaluates all policies and carries out environmental assessments after projects are completed."についてです。

問い合わせの趣旨は、この文中の"after"は"before"ではないのでしょうか、自然環境を元の状態に戻すことが不可能な、事業完了後の環境に及ぼした影響の評価は無意味と思われるからです、というものでした。

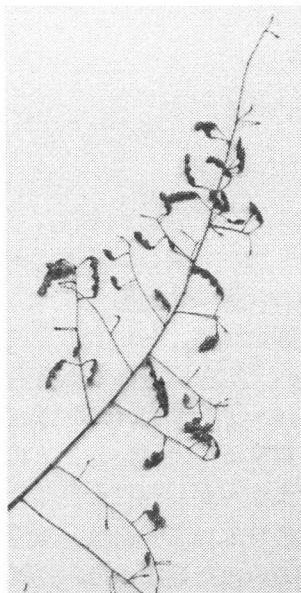
私どもの見解は以下の通りです。

今日、環境アセスメントについては、事業の前に行なうものと事業の後に行なうものが考えられています。事業前のアセスメントについては、すでに1997年6月に「環境影響評価法」が成立しているところですが、法案成立より約半年後に行われたこの対談において堂本氏は、事業の後にも環境への影響を評価する制度の確立の必要性を説いておられるわけです。それゆえ、本文の表現通りで問題はありませぬ。

しかしながら、堂本氏からも誤解のないよう授業等でご説明願えないだろうかとのご意見も頂きましたので、本テキストが増刷される折には「注釈」において補足説明を付け、同種の疑問が生じないよう配慮する所存です。

文末ではございますが、先生の一層のご発展を祈願申し上げます。

監修者・編者一同



【鶴見テキスト特集】

NO.2

Date: Thu, 18 Jan 2001

From: Kato Sadamichi

Subject: [aslej:01282] Re: Fwd: 鶴見テキスト：学会 ML掲載のお願い

ASLE-J会員の皆様

鶴見書店テキストの件についての監修者・編者一同のご見解がMLに掲載されました。これは私あてにはなっておりませんが、私が12月13日付けで監修者・編者一同に「堂本暁子さんのご希望」と題してお送りしたメールに対するご返答を兼ねたものと推察されますので、取り急ぎ、まず私が感想を述べさせていただきます。

ご回答ありがとうございます。一口で申しますと、言わば前世紀の、昨年9月時点まで論議が逆戻りしたと言えるのではないのでしょうか。つまり今回のご回答では、インタビューにおける堂本氏のご発言の意図を再々確認したにとどまり、問題の二つの英訳文の処理は未解決のまま残された、ということです。

一 順を追って申しますと、2000年9月3日付け（4日ML掲載）の監修者・編者一同からのご回答に、オリジナルの日本語による対談記録が添付され、堂本氏ご本人の発言の意図が明らかになり、それに伴い問題は一つではなく、二つに増えました。

【対談記録の該当箇所】（堂本）すべての政策についてチェックし、事業の後の評価もきちんとするシステムを作らなくては行けない。今ばらばらに行われている政策を環境面から束ねる政策がない。日本には今、ぜひそうした政策が必要です。

【不適切な英文】

We need a system that evaluates all policies and carries out environmental assessments after projects are completed. There is no general policy on the environment, which is what Japan needs right now.

私は上記の連続する二つの英文が不適切ではないかとご質問していたはずですが、今回のご回答は第1の文についてしか触れていません。しかもそのご回答によりますと「堂本氏は、事業の後にも環境への影響を評価する制度の確立の必要性を説いておられ

【鶴見テキスト特集】

るわけです。」とのことですから、堂本氏の対談記録と12月半ばにお寄せいただいたメッセージに続いて、三たび「事業の後の評価も」という発言意図が強調されたわけです。しかし日本語の「も」に相当する英語表現はテキストの英訳文には使用されていません。従って誤解を招く不適切な文のままであることに変わりはないのではないのでしょうか。

二 12月半ばのメッセージでは堂本氏は下記のように述べておられました：

[12月半ばの堂本氏のメッセージ]

57ページのご指摘の箇所をチェックをしましたところ下から3行目は私の意図する内容と違った訳になっていました。

「We must create a system that checks all policies and properly conducts post-project evaluations as well. There is no overall environmental policy that ties together our diverse policies in different areas. It is this type of general policy on the environment that Japan needs right now.」

が正確な訳です。57ページ下から2行目から58ページにかけての文章は「いまばらばらに行われている政策を環境面から」という前段の部分が欠落しておりこの部分なしでは意味が通じません。加訳の必要があります。加藤先生がお示し下さったA・Bの2案はいずれも正確な訳ですが、全体の英語の調子からいってA案が適切かと存じます。今の訳のままでは「すべての政策に環境の視点が必要である」との、この文章の核ともいえる内容が抜けてしまうので、加藤先生のほうから加訳、修正をして下さるよう監修者・編集者にお話いただけたら幸甚に存じます。

よろしく願い申し上げます。

堂本暁子 (Date:12 Dec 2000) <引用終わり>

今回高田先生宛に寄せられた新たなメッセージには、前のメッセージを取り消すとは一言も書いてありません。「すでに印刷を経た現段階で、これ以上の具体的提案を私どもの方からするつもりはございません。」とありますから、(1) 普通に読めば、前回のメッセージでの「加訳、修正をして下さるよう」というご提案はそのままにしておき、「これ以上」は提案しないという意味にとれるのではないのでしょうか。

(2) 「すでに印刷を経た現段階で」という言葉

は、テキスト修正に要するコストや出版社や編集者の労力に配慮したお言葉のようにもとれますが、そうすると英訳文の不適切さに関するご判断は不変だが、修正の提案を遠慮なさったともとれます。もしそうならばASLE-J学会はこのテキストの販売収益の幾分かを受け取っているわけですから、要求されなかったからといって不適切な英文の修正を先送りすべきではないでしょう。修正英文や若干の注の追加を含む補遺を送ることが、それほど大変なコストや労力を要することとは思えません。

(3) 仮に、英訳文を不適とするご判断を全面的に撤回し、英文に問題はまったくないので修正は要求しないという意味だとすると、----普通に読めばそうは解釈来ませんが----ご判断をわずか2週間ほどの間に180度転換したことになりますから、高田先生から堂本事務所に対し相当に説得力のある説明がなされたのであろうかとも思いますが、その間の経緯がまったく明らかではありませんし、今回のご回答にもそのような説明は見あたりませんので、この(3)は考えられないのではないのでしょうか。

三 実を申しますと、堂本氏がテキスト修正を提案するかしらないかということは、決定的な意味を与えるべき事柄ではないように思います。無論ご要望は重視すべきですが、最終的に修正すべきか否かは対談者が判断することではありません。問題はコミュニケーションが間違いなく成立するか否かの問題です。つまり情報発信者の意図が、受信者に十分に間違いなく伝わっているか否かという問題です。この場合情報発信者の中には話者(堂本氏)および監修者と編者が含まれると見なせるでしょう。受信者は読者すなわち教科書を使用している学生と教員です。対談記録と12月12日のメッセージは、発信者が対談で伝達しようとした意図を確認する上で重要な意味がありました。監修者・編者もその伝達意図の点では堂本氏の見解と一致しています。ただしその意図が十分に間違いなく伝わっているか否かは、受信者が判定することです。発信者である話者(堂本氏)および監修者と編者が判定すべきことではありません。私の授業の学生たちも、私自身も受信者として、発信者の意図が十分に間違いなく伝わる英文だとは、とても言えないと判定しています。-----今回のご回答を学会の回答として教室で公表することは危険ですので、そうするつもりはありませんが、仮にそうした場合納得する学生はほとんどいないでしょう。取り急ぎ、私の見解を述べさせていただきます。(2001年1月18日 加藤貞通)

【追加コメント】

1. (石幡直樹 東北大学) 鶴見テキストについての最終処理の文面をメールで読みましたが、腑に落ちない点がいくつかあります。メールの文章を見る限りでは、堂本さんは、これ以上英訳についての議論はうち切りたいと言っているだけではないのか。できれば訂正をと、まだ望んでいるのではないのか。電話での説明とはどのようなものだったのか。訂正しないという方針を堂本さんに伝えたのか、などです。

経緯はともかく、昨年末の段階であるように明確に堂本さんの意志が確認できたわけですから、また環境政策に関する重要な点を含む訂正になりますので、なるべく早く加藤さんの提案を実行して、訂正訳を公表すべきだったと現在でも考えています。

これまでは、様々な要因から議論の行き違いや空回りがあったように見受けられます。加藤さんの今回の「直訴」はそのような膠着した状況での止むに止まれぬ気持ちからと思います。編者でないものがどのような権限で著者の一人と連絡をとったのか、という意見もあるでしょう。また、誰であっても一読者として著者に質問する権利はあるはず、とも考えられます。この辺は後手にまわった感のある学会としての対応を反省し、まず訂正訳の公表を実施してから、議論して行くべきだと思います。

2. (加藤貞通 名古屋大学) (イ) 2001年1月半ばに監修者・編者一同から「お知らせ」がテキスト利用者に郵送されました。これは既に発行され使用中のテキストに問題点はないかどうかの検討、いわば「事後評価」を行ったものでした。環境アセスメントに関連する問題箇所の英文はafterでもbeforeでも変だし、政策評価の関連でも英文が不備で、それらの注も不備と考える者にとっては空虚な「事後評価」でした。最大の問題は検討結果それ自体よりも、そのプロセスにおいて、テキストの利用者が検討から閉め出され、従って対話がなかったことです。3回の回答いずれも一方向的な回答であることが強調され、質問や異論を拒絶するものであった点が印象的です。テキストの監修者・編者、すなわち作り手が自らの制作物を自分たちだけで事後評価し、しかもその検討プロセスを公開せず、同じ自己評価の結果だけ繰り返し通知した形になりました。このやり方こそ、今日の公共事業の環境アセスメントにおいて厳しく批判されているところの、住民参加・対話を欠いた権威主義的な古いやり方にほかな

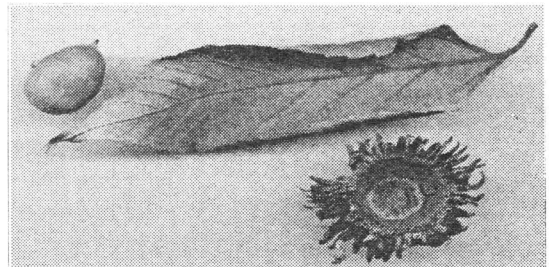
【鶴見テキスト特集】

りません。更にまたテキスト再版に向け一部の者に限定して非公開で問題点の問い合わせが行われたそうですが、学会編と銘打つならば、一般会員に公開して改善案を募るべきではなかったでしょうか。不明朗なことです。

(ロ) 堂本氏の第2のメッセージ「これ以上の具体的提案を私どもの方からするつもりはございません。」という文は、「具体的提案は既に行った提案限りにする、今後は提案しない」という意味ではないでしょうか。ごく単純な文です。第1のメッセージの提案を取り消す意味に解することは、恣意的な歪曲です。監修者・編者および会員の皆さまに、もう一度二つのメッセージを読み直していただきたく思います。皆さまの自己修正の余裕あるいは復元力に期待しております。

(ハ) 鶴見のテキストは、ASLE-J学会が会員たちと世の中の人々にたいして発した問いかけです。私は一会員としてその問いかけに積極的に応じたのでした。ところが監修者・編者側には、対話の糸口としての(私を通じての)学生の疑問に対応する態勢が出来ていなかった様子でした。権威ある正解を示そうと一生懸命になられたのかもかもしれません。コミュニケーションの不完全さが問題の場合どちらか一方の判断のみで十全な解決に至ることは無理、とこちらが思っているものですから、どこかですれ違ったのかもかもしれません。恐らくは対話の押し付けのごとくにお感じになられたことでしょう。配慮不足なことをいたしました。しかしいろいろなレベルで、様々な問いかけがあり対話があるはずですから、まるきり無駄だったわけではないでしょう。自戒し希望を育てたいと思います。隠蔽せず、自分たち自身の実態に批判の目を向けてこそ、ASLE-Jの将来が開けるのではないのでしょうか。

3. (高橋守 秋田県立大学) 非常に単純な問題です。鶴見テキストの問題箇所を改訳すべきか、改訳しなくてもよいかという2つの意見があるだけのことです。どこから見ても改訳したもののほうが元の日本語を正確に表現しています。従って改訳した文を別刷にして教科書に添付し配付すれば済むことで



ASLE-Japan/文学・環境学会 第7回全国大会 研究発表募集!

Call for Papers at ASLE-Japan 7th Annual Meeting 2001 in Tokyo!

日程: 2001年 9月15日(土)・16日(日) {17日はexcursionの予定}

場所: 青山学院大学

・総研ビル11階・第19会議室

ASLE-Japan/文学・環境学会第7回全国大会での研究発表をご希望の方は、6月30日までに「タイトル」と「要旨」を添えて下記へご連絡下さい。発表内容によってはシンポジウム形式、円卓セッション等になる場合もあります。その際には改めてご相談します。個人、共同、グループでの応募いざれでも結構です。

また写真、ビデオ、録音、その他、文字表現以外のメディア、ジャンルに関するものも積極的にご提案下さい。展示室も用意する予定です。その他、大会開催についてアイデア、ご希望を下記までご連絡下さい。

【応募要領】

1) タイトル+要旨【約400字(日本語)または250語(英語)】

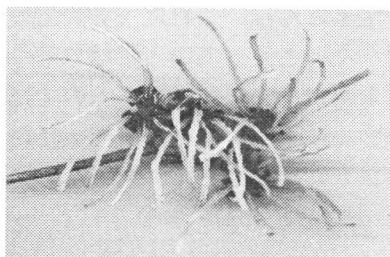
2) 氏名、所属、住所、電話番号、ファックス、E-mail 番号を明記して郵便で下記へお送り下さい。

締切: 2001年 6月30日

【連絡先】

太田雅孝

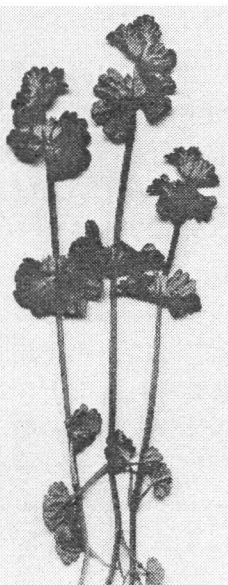
【訃報】 1月10日、山影隆氏(新潟大学)が急逝されました。ご冥福を祈ります。



▲メーリングリスト加入ご希望の方は、運営委員のアドレス(bobby@akita-pu.ac.jp)宛にメールでお申し込みください。現在の登録アドレス数約60。

▲「エフエム二風谷放送」開局

北海道新聞によると、アイヌ語の普及をめざすミニFM局が日本で初めて、四月八日から月一回、平取町二風谷(にぶたに)で放送を始める。「言葉は民族の魂」と訴える萱野茂さんが準備を進めてきた。開局にあわせて、ホームページ「国際先住民族ネットワーク」を設け、放送内容を発信するなど世界の先住民族との情報交換にも乗り出す。このFMは免許のいらない微弱電波を利用するため、周囲数百mでしか聞けないが、メディアを持つ意義は大きいだろう。



POSTSCRIPT

♠ 特集ページに加え、長文の投稿多数のため、増ページにしました。世界のASLEの活況をご覧ください。ご協力有り難うございます。

♣ キャンパスの木の葉・草の葉特集もやりました。名前は? 当ててください。

♥ 春は蛙の目借り時、人みな眠れ、眠れ。(KT)



ASLE-Japan
文学・環境学会
Newsletter No.10

【発行】ASLE-Japan/文学・環境学会
事務局: 〒903-0213 沖縄県西原町千原1番地
琉球大学 法文学部 山里勝己 研究室内
Tel & Fax: 098-895-8295
E-Mail: yamazato@ll.u-ryukyuu.ac.jp

【編集】
編集代表 加藤 貞通
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学言語文化部
Tel. & Fax: 052-789-4188
E-Mail: h44558a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

2001年3月21日発行

再生紙を使っています